

家に光と力あらしめよ

皇紀二千五百五十八年、我らは国家未曾有の歴史的重大事変に遭遇したまゝで新年を迎えた。今こそ日の本の真の力の顕現發揮せらるべき時である。我らは、今、戦没将士の英霊に対して、沈痛なる懺悔と、感謝の熱きものを胸に抱いて念仏せざるを得ない。崇高、尊厳、ああ、我ら言うべき言葉を知らず、謹慎合掌懺悔して、奉公の実を挙げべき秋である。

力

個人の上に様々な問題が起きて来る。欲しいものは力である。家庭の中に様々な苦悩がおしよせて来る。欲しいものは力である。

国家が未曾有の大事変に遭遇した、いよいよものを言うのは力である。

いよいよという時になると、全てものをいうのは力のみである。

力の問題の解決は、遂に人生そのものの解決であり、全ての問題の解決である。

真の力は如何にして得られるか。真の力とは何か。

教

人間は何によつて強くなるか、何によつて力を得るか、云く「教」である。教以外に、人間及び社会、国家すべて、人間の世界を強くする何物もあり得ない。

教育、教化以外にすべて、人間を強くする何物もあり得ない。これは実に、千古万一古にわたる不朽の断言である。

人を強くしたいか、教えを聞け。家を強くしたいか、教を聞け。団体を強くしたいか、教を聞かじめよ。国家を強くしたいか、教育を徹底せよ。

されば、教を受けずして、自己を放置するものは、自己を世の落伍者とし、敗残者たらしめる唯一の方法をとるものである。正しい教より外に遂に人の生活を成就しない。されば人は必ず正しい教の門をたたかなくてはならない。人にして若し正しい教を受けなければ、必ず正しからざる心を持ち、正しからざる心は、正しからざる教を受取る。悪友、悪知識、悪思想なくして墮落し失敗した者は有り得ない所以である。

かるが故に「教」の問題こそは実に、人生に於いて、国家、社会、家庭に於いて考えられねばならぬ根本の問題である。

一人の青年は悪友に誘はれてあたら一生を葬り、一人は善き父母の教に育てられて大成し、一の家は正しい仏の教によつて一家をあげて光に生き、一の家は夫婦和せず、親子たがいに恨み、氷の如き、闇夜の如き、悲愁の修羅道を出現する。誠に正しき教の受取られざる世界はすべて、無智と、暗黒と、無道義とによつて、不幸に泣かねばならない。

道義の根本

真実の教は、必ず人の上に、真実の道を成就する。

道以外に、真に人を強くするものは外にあり得ない。不勉強、放蕩無頼の徒の中に、やがて一国を率いる宰相なく、やがて徳一世を風靡する高僧聖者はあり得ない。しかして忠孝一体の道義の根本に要求せられるものが、無我の大精神である。この無我の二文字こそ、仏教思想の根幹である。無我こそ、仏教の根本唯一の大法印である。

「仏法は無我にて候。」真の力は、ただ無我の心力の上にのみあり得る。我らはこの度の事変に於て忠勇なる我が将兵の上に、この尊さを拝する。

智慧

「汝等能く此の世に於て、端心正意にして衆悪を作さざれば甚だ至徳と為す。」(大無量寿経)

端心正意とは、心を端しくし、意を正しうすることである。しかして、端心正意とは、他力の大信心のことである。如来本願力さながらの大信心は、端心正意と言われ「甚だ至徳と為す」と讃えられるのである。無我の大信心であり、無上道なるが故である。

弥勒菩薩、世尊に申して云く

「今、佛に値ひ、復無量寿仏の声を聞くことを得て歡喜せざるはなし。心開明を得たり。」

無量寿仏の声を聞くとは、世尊の教えを通して、大無量寿経を聞くことであり、その教を通して端心正意を得ることである。しかして、この真実教を聞く者は、「心開明を得る」のである。心が開いて明らかである。端心正意の人は、心に開明を得るのである。歡喜はこの人のものである。真の生きる力は、「心開明を得る」ことによつて、その底に動く。

然るにもし、真実の教を聞かず、道を得ないならば、

「善を為さず、道徳を識らず、身愚に神闇く心塞り意閉づ」(大経)と説かれる。

教を聞かず信ぜざる者は、道を生きず、身愚神闇とて、身も心も愚かに闇いのである。したがつて、心塞意閉と、心は塞り閉じて闇の世界を生きているのである。

心得開明か、心塞意閉か、人生が暗であるか、光であるかは、かかつてここにある。如来浄土の真実教は、必ず必ず、如何なる人にも、心得開明、開神悦体を得しめ、教を聞かざるものは、必ず身愚神闇、心塞意閉と、一切が塞がつてしまうであろう。

如来浄土の真実教は、信心の智慧を成就し、無上道を歩ましめ、心を開いて明るくせしめ、歡喜を得しめ、不滅の光、信の力を与えるのである。

心意の閉塞するものは、力を失う。小は一個人より、大は一国の軍団まで、心意閉塞するものは力を失う。されば、教によつて智慧を得、智慧によつて道を歩み、道光によつて、心得開明を得る者のみ永遠の勝利者である。

されば人の子よ

教を聞かずして、この世を空しく、無意味に終る者のことを大無量寿経に説いて言

「道徳を教語すれども心開明ならず。恩好を思想して情欲を離れず、昏蒙閉塞して愚惑に覆われ、深思熟計して心自ら端正に、專精に道を行じて世事を決断すること能わず、便旋べんせんとして竟おわりに至る。年寿終尽すれども得道すること能はず、奈何ともすべきこと無し。」と。

されば急ぎても急ぐべきは、汝自身の教化である。教を受くることなければ、「恩愛思慕」とて愛欲情欲より一步も出でず、愚惑におおわれたままで、便旋うろうろとして年寿を終るに至るであろう。

家

汝自身を教によつて道に生かせば、やがて汝の家庭が道と光に榮えるであろう。

家庭は、孝道の成就さるべき道場であり、夫婦相和の道場であり、祖先の余徳の輝く恩田であり、汝自身の一切である。されば、まず家庭をして、真実道の道場たらしめよ。家庭を教の生きる有難い楽園たらしめよ。

国家も、社会もすべて、まず家が道によつて美しく成就されてのみ、強大を致すことが出来るのである。されば、念仏の子よ、汝の眞の力を、まず家庭に於て成就せよ。家をして心得開明の光によつて満たせよ。家に於て不幸なれば、世に出でても不幸であろう。まず、汝の力を家において成就し發揮せよ。

家に光あらしめよ

とも

3

家に仏壇ありや、しかしてみ光は点されてあるか。

先祖代々ともされた燈は、ともされてあるか。先祖代々の人たちが、合掌せる佛前に、合掌しているか。しかして汝の胸に光ありや。不滅の燈ありや。

「父の餘せる教令を轉た相承受す。先人、祖父素より善を為さず道徳を識らず、身愚に神闇く心塞り意閉づ。」(大経)

これは、愚痴より生れる苦を説かれるに當つて、祖先より子孫代々邪見を受け伝える呪われた家を示されたものである。正しい教の流れぬ家を示されたのである。

父間違えば、子間違い、子間違えば、孫また間違える。さればまず汝の胸に燈をともせ。心に開明を得よ。暗の家に教の光を入れよ。

新らしい年は来た。一家の主人よ、主婦よ。汝の家に光あらしめよ。家興隆の力は、教によつてのみ開明するであろう。